様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月２５日現在

機関番号：３４２０５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009　～　2011
課題番号：２１５００６１５
研究課題名（和文）　アスリートのキャリアトランジションに伴う発達モデルの質的検討

研究課題名（英文）　Qualitative Analysis on Developmental Model during Athletes' Career Transition

研究代表者
豊田　則成（TOYODA NORISHIGE）
びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・教授
研究者番号：00367913

研究成果の概要（和文）：
本研究は,「キャリアトランジションプロセスを経ていく中で，どのような発達課題に直面するのか」というリサーチクエスチョンの下,元オリンピアンへのインタビューを質的に検討した結果，オリンピアンは『自分らしさの感覚と自分らしさの混乱の間で，①引退に向き合い，②現役に折り合いをつけ，③次のキャリアに移行し，④つながっている感じを見出し，⑤積極的に取り組む，という発達課題に直面する』という知見を導き出した.

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study is to explain what developmental tasks were confronted by Japanese ex-Olympians trough their career transition. I conducted some semi-structured interviews for 10 Japanese ex-Olympians about their career transition experiences. As the result, Japanese ex-Olympian confronted some developmental tasks between identity achievement and identity confusion, for example, 1) confronting with some difficulties through the athletic retirement by oneself, 2) striking a balance as a ex- Olympian, 3) transiting to the next career form Olympian, 4) getting a sense of link between Olympian and ex- Olympian, and 5) making the positive effort to the present after their transition.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康スポーツ科学・スポーツ科学
キーワード：キャリアトランジション，発達課題，発達モデル，質的検討，アスリート

１．研究開始当初の背景

アスリートのキャリアトランジションにおける心理社会的問題について概観してみると，まず，欧米諸国では，1980 年代からアスリートのキャリアトランジションを支援するための研究が活発に行われ，専門的な介入方略が具現化されている．すなわち，キャリアトランジションを期分けし，それぞれの介入方略を提示し，既に実践している．

一方，国内では，2000 年初頭に日本オリンピック委員会や J リーグがキャリア支援プログラムを開始し，ある一定の成果を挙げ

てきている．しかし，その根拠となる実践的研究は希少であると言わざるを得ない．従って，本研究の成果は，国内外の研究実情を補完することを目指したともいえる．

特に，国内の現状を鑑みると，アスリートの生涯発達を捉えるための科学的理論が充分に検討され，実践されているとは言い難い．その理由として，１）既存のキャリアサポートプログラムは，アスリートキャリアからセカンドキャリアへの移行のみに焦点を当てるにとどまっていること，２）国外のケースを模倣するに留まり，我が国独自のサポートプログラムの構築・実践が立ち遅れていること，など大きく２点が挙げられる．

本研究のようにアスリートの引退後の人生を包括的にサポートすることに着目することは，捉えるべき問題事象を多角的に捉える試みとして意味深く，大きな意義があるといえる．一方，研究対象の生活様式（環境の影響）から体験様式（環境への作用），生活世界（外的世界）から意味世界（内的世界）に至る個人のあらゆるリアリティをデータとするところから，本研究を「語り研究」と称しても過言ではない．目前の現象をクロノロジカルな外的事実として捉えるのではなく，自己にとっての意味や捉え方を内的事実として捉え，それを丁寧に解釈することで個人の理解は深めることができる．総じて，このような手法にはかなりの骨折りが予測されるが，それ故に，個人の内面に接近できるようになると考える．

２．研究の目的

本研究は，アスリートのキャリアトランジションに伴う発達モデルについて質的に検討することを目的としている．この目的の達成のため，本研究は３つの研究課題を設けた．

１）既存の生涯発達モデルを概観し，アスリート特有のキャリア問題に援用できる側面を包括的に検討する（文献研究）．

２）キャリアトランジションに直面した元アスリートに対して継続的なインタビュー調査を実施する（実践研究）．

３）アスリートのキャリア発達モデルを導き出す（キャリアトランジション問題への介入）．

３．研究の方法

まず，質的研究法に関連する先行研究を概観・整理することで，研究手法の熟達を目指した．このことによって，調査の観点や進行方法，タイムスケジュール，インタビューの仕方や観察記録の取り方など，一貫性かつ柔軟性を有する調査マニュアルを作成することができた．これにともなって，次のような研究方法を遂行するに至った．

①上記１）に関連して，既存の生涯発達モデルを概観し，アスリートの生涯発達において有益な知見を整理する．

②上記２）に関連して，元アスリートへの継続的なインタビュー調査を実施した．１対１形式の半構造化インタビューを，元アスリート 10 名に対して実施した．予めインフォーマントに承諾を得た上で，会話の内容を IC レコーダーに収録し，その後，逐語化し，インタビューデータと位置づけた．そして，GTA による質的検討を行った．

③上記３）に関連して，インタビュー調査の結果を複線径路・等至性モデル（以下 TEM と称す）（Trajectory Equifinality Model: サトウ，2009）を参考に視覚化した．研究対象となったのは，元オリンピアンの女性５名．かつて日本代表としてオリンピックに出場し，調査時は現役引退を経て数十年経過していた．

４．研究成果

１）既存の生涯発達モデルの概観

生涯発達心理学研究の中でも，特に，発達課題について有益な知見を概観し，整理した．このことによって，アスリートがキャリアトランジションに伴って直面する発達課題を予測した．特に，Levinson (1978) や Erikson (1982)，Bridges (1980)，岡本 (2007) などの研究成果を概観したことにより，人生における「過渡期」に着目した一定レベルの発達モデルが確認された．

２）インタビューによる質的検討

ここでは，10 名の元アスリートを対象としたインタビュー調査の結果を質的に分析した結果，a)オリンピック出場という大きな達成感を得る，b)引退に向き合う，c)自分に折り合いをつける，d)競技を引退する，といった必須通過点を経由しながら，【自分らしさの感覚】と【自分らしさの混乱】の間で，揺れ動くプロセスを確認することができた．

３）TEM による発達モデルの視覚化

ここでは，アスリートが競技引退に伴うキャリアトランジションに関連して直面した様々な人生選択や行為について共通性と固有性，多様性といった観点から捉えながら，時間経過における変容プロセスについて TEM を用いて質的に検討した．具体的には，「キャリアトランジションプロセスを経ていく中で，オリンピアンはどのような発達課題に直面するのか」というリサーチクエスチョン (RQ) を設定し，インフォーマント (Inf.) の「語り」を基に TEM 図を作成し，キャリアトランジションに伴う質的な変容を構造化し，アスリートが直面する発達課題を検討し，モデル化した．分析の結果，29 個のカテゴリー（１対の両極化された EFP，23 個の BFP，4 個の OPP）と 4 個の SD（社会的方向付け）を生成し，TEM 図(Fig.1：オリンピアンの競技

引退に伴うキャリアトランジションプロセス：本報告書の最後尾に添付)を構成し，構造構成的な解釈を試みた．

そもそも発達課題を検討するためには，目前にある課題のレディネスに着目しなければならない．TEM 図から，[積極的に取り組めない]や[何もやる気が起こらない]，[不全感]など，【自分らしさの混乱】につながるような状態には，[つながりのなさ]や[取り残された焦り]，[先行きへの不安]が直接的に関連していた．一方，[次のキャリアへ移行]し，[つながっている感じ]を持ち，[積極的に取り組む]ことは，それぞれ引退後の【自分らしさの感覚】を促している．これには，どのようにして現役に[折り合いをつける]のかということが大きく影響していた．

まとめとして，上記の RQ の下，TEM を検討した結果，オリンピアンは『自分らしさの感覚と自分らしさの混乱の間で，①引退に向き合い，②現役に折り合いをつけ，③次のキャリアに移行し，④つながっている感じを見出し，⑤積極的に取り組む，という発達課題に直面する』という仮説的知見を導き出した．今後は，［折り合い]に着目し，発展継承的に検討していかねばならないと考えている．

このような取り組みから，本研究では，アスリートのキャリアトランジションに伴う発達課題の解決について次のような知見をまとめるに至った．

【１】どのような発達課題に取り組むのか

本研究の成果からは，上記の通り，①引退に向き合い，②現役に折り合いをつけ，③次のキャリアに移行し，④つながっている感じを見出し，⑤積極的に取り組む，といった５つの発達課題を導きだした．以下では，それぞれについて考察を述べる．

①引退に向き合う

どのようなレベルのアスリートもいずれ必ず引退を迎えることになる．そのような観点からすれば，引退は予測可能な側面も持ち合わせている．しかしながら，アスリートとして懸命に取り組んでいる中で，引退した後への取り組みを強化することは現実的ではない．従って，現役時代は，自己の将来像についての可能性に何らかの形で触れておく程度で良い．そして，実際に引退に向き合った際には，その自己の可能性を実感的に確かめる機会を設け，アスリートではない自己の可能性を拡大していく事が求められる．

②現役に折り合いをつける

引退した後も現役アスリートであった自己を振り返り，未練を強く感じてしまい，次の一歩を踏み出せずにいるケースもあった．それは，アスリートとしてのアイデンティティを強めてきただけに至極当然の姿であるかもしれない．しかしながら，かつてアスリートであったことに折り合いをつけ，漠然としたものであっても自分の将来を見通し，今取り組むべき事を見出していくことは，自己の現在を中心として，自己の過去と未来を内的につないでいくことにもなる．このような時間的展望の感覚が獲得できている場合，過去への未練は，今後の取り組みで奮起するための起爆剤になることが期待できる．

③次のキャリアに移行する

外的キャリアと内的キャリアという２つの側面からキャリアを捉えていくと，まず，アスリートからアスリートではない別の外的キャリアへの移行は，引退したアスリートの誰もが実現しなければならない発達課題であるといえる．先述したが，現役アスリートとしての取り組みにやり残しを感じ，また，アスリートであったことに未練を感じることで，人生の次なる一歩を踏み出せない場合，外的キャリアをも獲得することが困難になる．外的キャリアの喪失は，生計を立てられなくなったり，社会から孤独になってしまったり，深刻な問題へと発展することが危惧される．しかし，次でも触れるが，外的キャリアを得る事ばかりを優先し，スムーズなキャリアトランジションを志向することには，懐疑的であらねばならない．

④つながっている感じを見出す

上記では，外的キャリアの問題を捉えたが，ここでは，内的キャリアの問題に言及することになる．個人の外的キャリアのトランジションをスムーズに，ソフトランディングに進めようとする動きは，今般の社会情勢の中でも多く見られる．しかしながら，外的キャリアのみならず，そこに内在する内的キャリアの一貫性もしくは「つながっている感じ」を有することが，個人の内面の成熟と大きく関連している．今回の元オリンピアンのインタビューを通じて散見された大きな問題は，外的キャリアと内的キャリアの一貫性の問題でもある．彼らは，表面的にはキャリアトランジションに対して適応的であったが，その一方で内面的には，非常に深刻な問題に直面していた．彼らは，険しい山を上り詰めてきただけに，その山を下ることも大きな困難が伴われるように感じられてならない．また，時間をかけて上り詰めてきたことだけあって，下ることにも時間を有するように感じる．そのようなことからすれば，「つながっている感じ」を持つことは，彼らにとって非常に大きな発達課題であるといえよう．

⑤積極的に取り組む

ここまで言及してきたように，アスリートのキャリアトランジションに伴う発達課題は，自己の内外の課題を積極的にまとめていくことに他ならない．現状に対して積極的に取り組む場合，アスリートであった時のアイデンティティ形成は，比較的，早期完了の状態に酷似していることがこれまでにも報告さ

れている．すなわち，アスリートとしてのアイデンティティ形成で積み残された課題は，アスリートではない新たな自己を再構築していく際に，再び問い直されることにある．アスリートとしての危機体験が，キャリアトランジションに伴う危機体験に影響し，引退に直面化したアスリートの危機体験が，その後の人生にも影響することは想像に難くない．競技引退に伴うキャリアトランジションの中で経験される危機体験を重要視し，現状に積極的に取り組むことで，引退後のアイデンティティ再体制化が充実したものとなっていくのである．

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計１件）
① 豊田則成　アスリートのキャリアトランジションに伴う発達モデルの質的検討～TEM を利用した質的アプローチから～，日本体育学会第 61 回大会，平成 22 年 9 月 10 日，中京大学

〔図書〕（計３件）
① 杉原隆 編著，福村出版，生涯スポーツの心理学　2010　総ページ数：268（第 15 章 アスリートのアイデンティティ形成とキャリア移行：163-173）

② 中込四郎ほか編著，ミネルヴァ書房，よくわかるスポーツ心理学　2011　総ページ数：200（Ⅸ　スポーツ臨床　9　引退の持つ意味：190-191）

③ Tatiana & Natalia (ends) Athletes' Career across Cultures, <in printing> Psychology Press/ Tailor & Francis Group (Chapter 7 : Athletes' Career in Japan: Before and After Termination in Sports)

６．研究組織
(1)研究代表者
豊田　則成（TOYODA NORISHIGE）
びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・教授
研究者番号：00367913

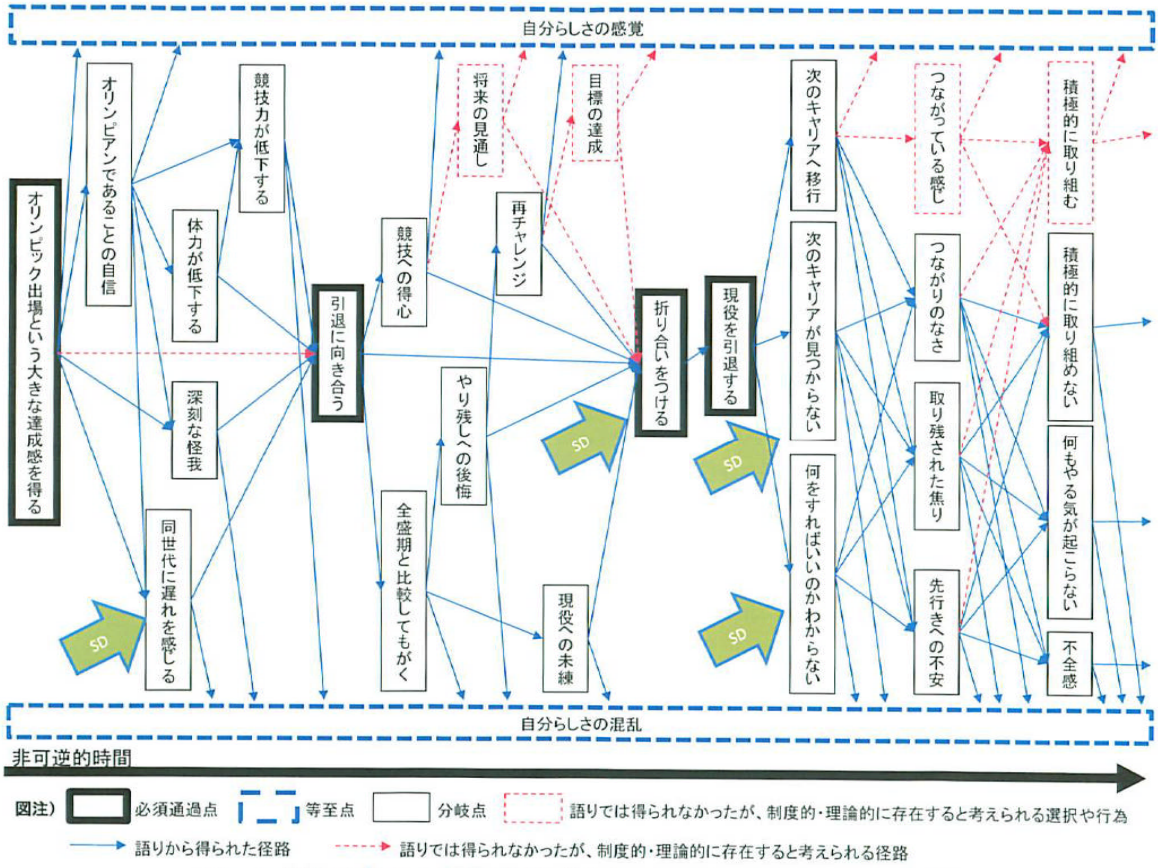

Fig. 1 オリンピアンの競技引退に伴うキャリアトランジションプロセス